

する基礎的な研究から、米国空軍研究所の Dr. FROES のグループによる、Nb 添加 Ti_3Al の急冷凝固、メカニカルアロイングなどの新しい製造法に関する研究まで幅広く研究がなされているように思われた。日本で注目されている $TiAl$ に関する発表はなかつたが、これは米国の軍事機密になつているためだそうで、逆に考えると、 Ti_3Al には大きな魅力はないということであろうか。いずれにしても、各国の Ti-Al 系化合物及び酸化物分散強化合金などの新材料、また急冷凝固、メカニカルアロイングなどの新しい製造法に対する関心は、非常に高いように思われた。

筆者自身が聴講した範囲外であるが、新しい試みとして注目された発表として、伊 Ginatta の「溶融塩電解法

による Ti の精錬」、米国 Ribbon Technology の「Over flow casting による溶湯急冷箔」があつた。また、用途開発関係で、地熱井への β_c 合金の適用、海上リグのストレスジョイントへの Ti-6-4 合金の適用、蒸気タービンプレードへの Ti-6-4 合金の適用をはじめとして、生体用、自動車用材料としての用途開発に関しても多数の発表があつた。

今回は 4 年後の 1992 年に米国サン・ディエゴで開催される予定である。

最後に、筆者は日本鉄鋼協会第 9 回日向方学術振興交付金の援助をいただいてこの会議に出席できたことを付記する。

コ ラ ム

ASEAN で成功する方法 (?)

近年、日本の輸出産事の担い手と目される自動車産業界を初めとして、エレクトロニクス、鉄鋼、金属加工など、あらゆる産業分野の工場が、堰を切つたように ASEAN 地区へ進出中である。

ASEAN 地区のウェイトは、世界経済の流れの中で年々向上し、例えば米国の輸出入貿易総額を、大西洋の往復金額と太平洋間のそれとに分けて比較すると、後者は前者をすでに 20~30% も上回っており、太平洋圏の時代到来と呼ばれるゆえんである。

従つて、国内産業空洞化是非論はしばらく置くとし、ASEAN 地区への進出や交流がますます活発化するであろうことは、論をまたない。

さて、日本企業が、ASEAN 地区を工業製品の生産拠点として注目し始めたのは、1970 年前後である。当時の進出企業の中には、1986 年の円急騰ショック以前にそうそうと撤退したものや、今日まで順調に拡張を続け、その先見性が羨望の的となつている企業な

どさまざまである。

そこで筆者なりに成功企業の最大公約数的共通点を拾つてみると、次のような諸点が浮かび上がってきた。すなわち、i) 工場環境の整備に力を入れている。ii) 最新鋭の製造設備が揃っている。iii) NC マシンを初めとしてコンピューター支援システムが徹底している。iv) 安全施設が完備している。v) 作業服などにも配慮が行き届き、ファッション性も高い。等々、いずれの企業も、土地柄を踏まえた暖かい人間性重視というコンセプトが貫かれていることは興味深い。

なお、ASEAN の人々の日本人観は、西欧人と比較して親近感はずしも高くはない。その原因はいろいろあるが、彼我の決定的な差は、供与し得るカルチャーの質と量にありそうである。

ASEAN の人々から親近感をもつて接せられる日本人像を、いかにして構築するかという課題は、今こそ真剣に考究すべき秋であり、この点を解決せねば ASEAN での成功はおぼつかないのではなからうか。

(日立金属(株)特殊鋼事業部 吉田勝彦)